

活動報告

佐久大学卒業生の看護実践能力に関する 看護管理者の評価

Evaluation of Saku University Graduates' Competencies
in Nursing Practice: Nurse Manager's Perspective

内山 明子^{*1} 川口 桂嗣^{*1} 武田 貴美子^{*1} 藤井 千里^{*1}
吉川 三枝子^{*2} 坂江 千寿子^{*1}

Akiko Uchiyama, Keiji Kawaguchi, Kimiko Takeda,
Chisato Fujii, Mieko Yoshikawa, Chizuko Sakae

キーワード：卒業生, 看護実践能力, 評価, 看護管理者

Key words: Graduate, Competencies in nursing practice, Evaluation, Nurse manager

要旨

佐久大学看護学部は、カリキュラムや教育方法の改善へ向けて、就職先の医療機関・施設の評価を把握できるよう「佐久大学看護学部における看護学教育に関する調査」を実施している。2020(令和2)年は、卒業後の変化をとらえられるように、直属上司(師長等)を対象にして、卒業後1年目、2年目から4年目、5年目以上の3群の状況について、同じ質問項目への回答を得る調査方法とした。

看護実践能力のディプロマポリシー別の評価では、『専門的な知識』『専門的な技術』の2項目は5年以上の群が「よく発揮している」という高評価であった。『自身のスキルや能力を高める努力』は卒業年数に関係なく高評価であったことから、入職時以降に未熟な知識や技術自覚して自己研鑽できる点が本学卒業生の強みと考えられる。『国際的視野』については、全体的に「発揮できていない」という評価であった。看護管理者による本学の卒業生の看護実践能力の評価では、概ね学士にふさわしい能力を発揮できるよう成長していると評価できた。

受付日2021年10月1日 受理日2021年11月19日

*1 佐久大学看護学部 Saku University Faculty of Nursing

*2 元佐久大学看護学部 ex-Saku University Faculty of Nursing

I. はじめに

佐久大学(以下、本学とする)は、2008(平成20)年に地域からの保健医療専門職育成の期待を受けて開設された。看護学部の単科大学として提供している教育内容を、就職先の医療機関・施設はどのように評価しているかを把握し、カリキュラムや教育方法の改善に反映できるように、卒業生に関する「佐久大学看護学部における看護学教育に関する調査」を実施した。1回目は、第1期生が卒業した翌年2013(平成25)年に就職先の医療機関の責任者(看護部長等)へカリキュラムや教育方法の強化・改善について調査した。「看護における課題の追求」について強化・改善が必要であるという評価であった。2回目は、2015(平成27)年に、卒業生が新卒で就職した医療機関・行政機関の看護部責任者へ、本学のディプロマポリシーに沿った看護実践能力の評価に関して調査した。1~2年目と3年目以上で区分し評価を得た結果、共通して評価が高かった能力は「基礎的な知識・技術」「いのちの大切さを深く理解し、擁護する能力」「医療チームの一員として協働する能力」「自身のスキルや能力を高める努力」であった。

2020(令和2)年は、新カリキュラム策定の時期でもあり、卒業生の成長過程を捉えるために、本学1期生から7期生までの全卒業生について調査を実施した。勤務先直属の上司を対象に、看護実践の状況と教育の質に対する評価を得ることを目的に調査を実施した。

本稿では、卒業生の看護実践能力の評価結果を報告する。

II. 調査方法

1. 対象者

卒業生の就職先で、日常的な業務を観察、把握、指導する任にある直属上司(師長等)とした。

2. データ収集方法

本学卒業生の卒業時点での就職先である調査対象施設147施設(県内58施設、県外89施設)の看護部責任者および施設責任者宛てに、就職した卒業生氏名のリスト、アンケートの趣旨と協力の依頼文および調査の応諾用の返信はがきを送付し、返信はがきには調査への協力の有無と対象となる直属上司の人数の記載を求めた。調査協力の同意が得られた施設の看護部責任者および施設責任者宛てに対象者の人数分の協力依頼文書、アンケート用紙および返信用の封筒を送付し、配布を依頼した。対象者が回答後、返信用封筒にて投函する方法およびQRコードを用いたWEB回答で回収した。

3. 調査期間

2020(令和2)年1月~3月

4. 調査項目

- 1) 施設の所在地
- 2) 所属部署

所属部署については、病院において、卒業生が1病棟に複数人配置されている場合が推測される。かつ、病院の診療体制から混合病棟である場合も配慮し、主な診療科を3つまで挙げるように依頼した。

3) 本学卒業生の看護実践能力

本学のディプロマポリシーを基に、『専門的な知識』『専門的な技術』『豊かな人間性と高い倫理観』『対象を幅広く理解し、援助的対人関係を形成する能力(コミュニケーション能力)』『看護における課題の追求(看護の課題を発見し、解決に取り組む能力)』『保健医療チームの一員として協働する能力』『地域特性と文化的多様性を理解し、健康課題を捉える能力』『国際的視野』『自身のスキルや能力を高める努力(自己研鑽する自律的学習姿勢)』の9項目の質問に対し、看護実践能力の発揮状況を「よく発揮している」「やや発揮

している」「あまり発揮していない」「発揮していない」の4段階評価とした。評価する卒業生を卒後1年目、卒後2～4年目、卒後5年目以上の3群とし、それぞれの能力を評価することとした。

- 4) 本学卒業生に対する全体的な他者評価
- 5) 本学卒業生の今後の採用について
- 6) 本学卒業生の就職後の資格取得や能力を發揮している活動について
- 7) 本学卒業生による優れた看護実践(提供)の内容
- 8) 本学に対する意見・要望
- 9) 今後、部署の看護職員が取得を希望している資格と、責任者として職員に取得して欲しい資格

4. 分析方法

記述統計および単純集計にて概要を把握し、卒業生の看護実践能力および卒業生に対する全体的な他者評価は、卒後年数ごとに集計した。自由記述については類似する意味内容別に分類した。

5. 倫理的配慮

佐久大学看護学部における教育の質に対する評価を目的としており、調査結果はすべて統計的に匿名性を守るよう処理した上で、教育の改善・充実の目的に限って用いることを文書で説明した。調査への協力は自由意思であり、返信をもって調査への同意とした。個々の回答内容を公表することはないこと、調査結果の概要は報告書やホームページ等で公表することを依頼文書に記載した。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の概要

1) 回収率

調査協力を依頼した147施設中112施設(76.2%)から同意が得られ、該当看護師長256

人にアンケート用紙を送付した。回答者は149人(回収率58.2%)で、郵送109人(42.6%)、WEB回答40人(15.6%)であった。長野県内の回答者は99人(66.4%)、県外の回答者が50人(33.6%)であった。

2) 就職先の病棟等の所属部署における診療科

挙げられた診療科数は291件であった。多く上がったのは、消化器内科21件、呼吸器内科20件、整形外科18件、循環器内科18件、脳神経外科16件であった。また、精神科10件、小児科10件のほか、産婦人科、回復期リハビリテーション病棟、結核、療養型、外来部門、訪問看護ステーションなどさまざまな部署であることが明らかになった。さらに、急性期に特化した救急、ICU、HCU、手術室という回答や、病院以外の保健センターから5件の回答も得られた。その他には総合診療科、地域包括ケア、リハビリテーションなどが含まれていた。

3) ディプロマポリシー別にみた看護実践能力の評価

卒後年数の異なる本学卒業生が同じ病棟に配属されていたため、看護師長による回答数は155件であった。その内訳は、卒後「1年目」の項目に回答した数は45件、同様に「2～4年目」では70件、「5年目以上」では40件であった。

ディプロマポリシーの項目別では、『専門的な知識』、『専門的な技術』は、卒後5年目以上の看護師が「よく発揮している」が52.5%であった。他の2群は「やや発揮している」が60%台であった。

また、『豊かな人間性と高い倫理観』、『対象を幅広く理解し、援助的対人関係を形成する能力(コミュニケーション能力)』、『看護における課題の追求(看護の課題を発見し、解決に取り組む能力)』、『保健医療福祉チームの一員として協働する能力』、『自身のスキルや能力を高める努力(自己研鑽する自律的学

習姿勢)』では、卒後年数に関わりなく3群ともに「やや発揮している」という評価であった。一方、卒後1年目では、『看護における課題の追求(看護の課題を発見し、解決に取り組む能力)』『保健医療福祉チームの一員として協働する能力』で「あまり発揮していない」が約40%みられた。

『地域特性と文化的多様性を理解し、健康課題を考える能力』は、「あまり発揮していない」という評価が卒後1年目は46.7%、2~4年目は47.1%であった。

『国際的視野』は、卒後1年目では「発揮していない」が48.9%、他の2群は「あまり発揮していない」という評価であった。(表1)

4) 就職後の資格取得状況と能力を発揮していると評価された活動内容

(1) 取得した資格

4名から回答があり、その内容は「ICLSインストラクター」「保健師」「糖尿病療養士」「高血圧・循環器病予防療養指導士」であった。

(2) 能力を発揮していると評価された活動内容

58名から回答があり、35件の活動内容が挙げられた。内容を類似性でまとめた結果、保健師は【保健活動に必要な能力】、看護師は【積極的な研修の企画と参加】【専門性の追求】【チームワーク】【サークル等での活躍・貢献】であった。(表2)

5) 優れていると評価された看護実践内容

本学卒業生の看護実践について、優れていると評価できる内容の有無とその具体的内容についての回答を求めたところ、100名から141件の自由記述が得られた。

意味内容を検討しまとめた結果【先を見据えた情報収集、アセスメントと看護】【対象の状況、思いを尊重した看護実践】【傾聴と双方向性を意識したコミュニケーション】【思いを受け止め寄り添うことへの優れた力】【患者・同僚を尊重した丁寧なかかわり】【多職種連携、協働、リーダーシップも発揮できる応用力】【自己研鑽の姿勢と周囲への影響】

表1 ディプロマポリシー別にみた看護実践能力の評価 N=155(1年目45、2~4年目70、5年目以上40)

		発揮していない			あまり発揮していない			やや発揮している			よく発揮している		
		1年目	2~4年目	5年目以上	1年目	2~4年目	5年目以上	1年目	2~4年目	5年目以上	1年目	2~4年目	5年目以上
1. 専門的な知識	度数	2	1	0	11	11	4	28	46	15	4	12	21
	割合(%)	4.4	1.4	0.0	24.4	15.7	10.0	62.2	65.7	37.5	8.9	17.1	52.5
2. 専門的な技術	度数	2	1	0	11	16	5	29	42	15	3	11	20
	割合(%)	4.4	1.4	0.0	24.4	22.9	12.5	64.4	60.0	37.5	6.7	15.7	50.0
3. 豊かな人間性と高い倫理観	度数	1	3	0	13	11	6	22	40	22	9	16	12
	割合(%)	2.2	4.3	0.0	28.9	15.7	15.0	48.9	57.1	55.0	20.0	22.9	30.0
4. 対象を幅広く理解し、援助的対人関係を形成する能力(コミュニケーション能力)	度数	1	3	2	10	14	3	22	34	22	12	19	13
	割合(%)	2.2	4.3	5.0	22.2	20.0	7.5	48.9	48.6	55.0	26.7	27.1	32.5
5. 看護における課題の追究(看護の課題を発見し、解決に取り組む能力)	度数	2	2	0	17	22	11	25	35	16	1	11	13
	割合(%)	4.4	2.9	0.0	37.8	31.4	27.5	55.6	50.0	40.0	2.2	15.7	32.5
6. 保健医療福祉チームの一員として協働する能力	度数	1	3	2	16	17	5	26	41	20	2	9	13
	割合(%)	2.2	4.3	5.0	35.6	24.3	12.5	57.8	58.6	50.0	4.4	12.9	32.5
7. 地域特性と文化的多様性を理解し、健康課題を捉える能力	度数	7	8	0	21	33	13	15	28	22	2	1	5
	割合(%)	15.6	11.4	0.0	46.7	47.1	32.5	33.3	40.0	55.0	4.4	1.4	12.5
8. 国際的視野	度数	22	23	7	15	37	24	6	10	6	2	0	3
	割合(%)	48.9	32.9	17.5	33.3	52.9	60.0	13.3	14.3	15.0	4.4	0.0	7.5
9. 自身のスキルや能力を高める努力(自己研鑽する自律的学習姿勢)	度数	2	4	0	8	19	7	28	34	18	7	13	15
	割合(%)	4.4	5.7	0.0	17.8	27.1	17.5	62.2	48.6	45.0	15.6	18.6	37.5

表2 能力を発揮していると評価された活動内容

能力を発揮している活動		データ
保健師	保健活動に必要な能力	一般的な(ポピュレーション)部分での健康教育(問題をあまりかかえてない人の健康増進)集団に対しての教育や講義は上手 データ処理などで知識や技術 保健師による予防活動(保健指導)、特定保健指導の実践 保健活動を考える自主的研究会での継続学習
看護師	積極的な研修の企画と参加	精神科に特化した研修に積極的に参加し、病院内でのグループワークに直結している 休日に自己研鑽のための研修会に参加し、業務に活かすように努めている 院外研修に積極的に参加している 認知症に対する研修に参加し、病棟スタッフへ伝達講習を行っている 精神だけにかた寄らず研修参加希望あるが、職場への還元率が低い 学会発表 法人内のローテーション研修に参加 新人の院内研修カリキュラムに熱心に取り組んでいる。課題も期限を守って実施している 講座の担当や後援会活動 人工呼吸器に対する研修など県外に行って自己研鑽している
	専門性の追求	ICLS、心電図の勉強会、NCPR、BLS 学生指導、在宅訪問、国際医療 医療安全、倫理問題 褥瘡チームのリンクナースとして活躍している 認知症ケアチームメンバー、リスクマネージャーとして活動している
	チームワーク	後輩指導、後輩の相談役・支援者 急変対応チームで率先して後輩指導を行なっている 病棟の係活動を先輩ナースと共に積極的に取り組んでいる 日々の看護を先輩に聞き教えてもらいながら頑張っている リーダーシップ
	サークル等での活動・貢献	看護研究・QCサークル 病院のスポーツ大会(フットサル)で活躍・貢献している
	その他	パソコン技能、語学力(英語)、人柄

【倫理観に基づいた判断と行動】【情報処理能力】【社会人基礎力】の10の内容にまとめられた。(表3)

IV. 考察

1) ディプロマポリシー別にみた看護実践能力の評価

『専門的な知識』『専門的な技術』については、卒後5年目以上の看護師については「よく発揮している」が52.5%と一番多く、経験による妥当な成長がうかがえた。卒後1~4年目の看護師の「やや発揮している」という評価が60%台であることから、入職後約1年から知識や技術を発揮できるようになっている

といえる。

『豊かな人間性と高い倫理観』については、「発揮していない」および「あまり発揮していない」の割合が30%であるが、卒後2年目以上になると「やや発揮している」および「発揮している」で80%台であることから、業務が1人でできるようになり、自分の看護実践を捉え始める時期に達すると、この能力が発揮され始めるのではないかと考えられる。

『対象を幅広く理解し、援助的対人関係を形成する能力(コミュニケーション能力)』『看護における課題の追求(看護の課題を発見し、解決に取り組む能力)』『保健医療福祉チームの一員として協働する能力』に関しては、すべての経験年数を通して比較的高い評価を

表3 優れていると評価された看護実践の内容

実践・評価内容	データ(一部抜粋)
先を見据えた情報収集、アセスメントと看護	患者・家族の情報を十分に把握し対象を捉えることができている アセスメント能力がある 看護計画に沿ったケアを立案、実施できる 退院後の生活を見据えて、看護展開ができ、退院支援につなげられている 患者それぞれの生活背景などを考慮した看護ができている 退院支援、家族も含めた看護実践 常に優先順位を考え、計画を修正しながら取り組んでいる
対象の状況、思いを尊重した看護実践	保健師による予防活動(保健指導) 多重課題ができる 対象に関心を持ち、何が必要か又は望んでいるのかを考えて看護実践している 患者の立場に立って考えられる 患者のニーズ、要望を取り入れている、患者中心に考える 自分のできる最大限(経験年数にあった)の力で患者のための看護を考え、実践できる
傾聴と双方向性を意識したコミュニケーション	対人援助において傾聴する力 患者の思いを引き出す力 スタッフともアサーティブにコミュニケーションができている 患者に必要な援助を考え、相談できカンファレンスで自分の考えをきちんと他者に伝えることができる 患者、スタッフとのコミュニケーション、または家族への情報の提供もできている
思いを受け止め寄り添うことへの優れた力	相手の気持ちを理解し、寄り添う看護 患者の苦痛や困っていることなどに寄り添うことはとても優れている 患者家族の訴えを傾聴し、寄り添えている 患者の要求(家族を含め)に耳を傾け看護展開できる 患者が困っているのではないかとという観点やもっとこうすればよいのではないかとという感性が高い 患者の思いに沿った看護が展開出来ている
多職種連携、協働、リーダーシップも発揮できる応用力	チーム医療 ケースについては、一人だけで抱え込まず、相談する力(連携)があると思う 地域の健康課題を把握し、直接的な保健サービスを提供するとともに関係機関とネットワークづくりを行い包括的に考え、支援することができる能力を持つ 責任を持ち任務・業務を遂行できる力と協調性があり周囲と協力することで、患者の安全・安楽を優先した看護が実践できている 多職種と共働しカンファレンスを行い、看護師として意見を述べるができる 多職種ともうまく関わることができている 人をまとめる力、周囲を見ながら、臨機応変に対応する姿勢
患者・同僚を尊重した丁寧なかわり	相手を尊重した関りができる 丁寧な対応、患者の接し方やケアが優しくて丁寧 スタッフ、患者さん、ご家族etc どんな対象者にも尊敬、尊重、敬意で接している 高齢者が多い病棟で、認知症の方も多。看護ケアに優しさを感じる。多職種ともうまく関わることができている 後輩や学生指導が丁寧
自己研鑽の姿勢と周囲への影響力	新しく得た知識をしっかりと自分の中で具体的に噛み砕き理解ができ、自分のものとして実践に活かすことができ、後輩の指導もできる 自身のスキルや能力を高め、専門的な知識や技術を身に付けている。自己研鑽する姿勢が優れている。また、同僚へもその知識や技術の研鑽を推進している点 真面目で学習意欲が高く努力する姿勢が優れている 疾患・治療など調べて理解しようとする自己研鑽の姿勢 性格的なものだと思うが、控えめではあるがコツコツと努力することができ、素直さ、一生懸命さがある 先輩看護師からも可愛がられており大切に育てていきたいと思う ねばり強く対応する力、前向きに受け止めて、めげない
倫理観に基づいた判断と行動	倫理をしっかり意識して仕事ができている 倫理的な問題を考えられる 倫理的視点も含め患者さんをみることができ 倫理綱領に則している
情報処理能力	記録、統計処理が上手 事例の検証・分析・データベース(可視化)能力
社会人基礎力	社会人としての秩序も保っている 提出物は早めに出せる

得ている。これらは授業や臨地実習で培われた能力であると考えられ、本学卒業生の良い特徴とも解釈できる。一方で、1年目は『看護における課題の追求(看護の課題を発見し、解決に取り組む能力)』『保健医療福祉チームの一員として協働する能力』では「あまり発揮していない」も30%台であることから、個人差と所属部署による業務等の違いも影響していると推測される。

『地域特性と文化的多様性を理解し、健康課題を捉える能力』に関しては、卒後1~4年目はあまり発揮できていない傾向にある。このことは、卒後5年目以上になると「やや発揮している」が55%となっていることから、地域特性や文化多様性を捉えるには一定の時間が必要なのではないかと考える。また、在学時から地域への関心や理解が深まるような教育をすることが課題と考えられる。

『自身のスキルや能力を高める努力(自己研鑽する自律的学習姿勢)』については、「やや発揮している」、「よく発揮している」が約95%を占めており高く評価されていた。佐々木、深田、奥田、畑山(2013)の臨床経験1年目から5年目看護師の実践能力に関する自己評価では、すべての経験年数で継続学習のコンピテンスが低い結果であり、看護実践力を高めるためには、継続学習を支援することが必要であると述べている。また、濱ら(2013)は、看護系大学卒業生の看護実践能力に影響する要因の分析した結果、看護実践能力を最も高めるのは科学的思考であった。この能力を高めるには日ごろから学会や研究会に参加することなどの自己研鑽が関連していると述べている。今回の結果から、自己研鑽する自律的学習姿勢については、本学卒業生の強みであり、看護実践能力の高評価に関連していると考えられる。自律的学習姿勢については、本学でアクティブラーニングを取り入れた授業を各領域が工夫し実践していることの成果として評価できるとも考えられる。

一方、『国際的視野』については、経験年数にかかわらず、「あまり発揮していない」と言う回答が多く、今後の教育内容へ反映すべき課題として明確となった。ディプロマポリシーに掲げられているが、カリキュラムに十分に反映できているかという課題が示唆された。また就職先施設でその能力が発揮できる場がなかったためか、あるいは本学が求めている「国際的視野」について臨床現場との概念の共有がなされていない可能性もある。「国際=海外」というイメージとなるが、本学の目的は、国内外の地域特性と文化的多様性を理解し、健康課題を捉える能力としている。今回のアンケートにディプロマポリシーを掲載していなかったこと、設問はその内容をイメージできるものであるかを検討すべきであったと考える。

2) 就職後の資格取得状況と能力を発揮していると評価された活動内容

資格取得状況については、ICLS、インストラクター、糖尿病療養指導士、高血圧・循環器病予防療養指導士など、日々の看護活動に必要な資格を取得していると考えられる結果であった。能力を発揮している活動では、専門性を追求し積極的に研修を企画し参加しているという内容から、自身のスキルや能力を高める自律的学習姿勢が伺える。前述したが、この姿勢は看護実践能力を高めることに有用な影響を与えているといえる。後輩指導や先輩看護師との関係が構築されていることも挙げられており、ディプロマポリシー別評価の『保健医療福祉チームの一員として協働する能力』が高評価であった一因と考える。

3) 優れていると評価された看護実践内容

優れていると評価された看護実践内容は、対象把握やアセスメント、看護実践に直結する【先を見据えた情報収集、アセスメントと看護】【対象の状況、思いを尊重した看護実践】と、対人関係を構築するための【傾聴と双方向性を意識したコミュニケーション】【思

いを受け止め寄り添うことへの優れた力】
【患者・同僚を尊重した丁寧なかかわり】、そして【多職種連携、協働、リーダーシップも発揮できる応用力】【自己研鑽の姿勢と周囲への影響】【倫理観に基づいた判断と行動】【情報処理能力】【社会人基礎力】であった。

【先を見据えた情報収集、アセスメントと看護】【対象の状況、思いを尊重した看護実践】では、看護を展開する上で重要なアセスメント能力の発揮、患者の背景や家族を含めた退院支援が実践できており、目の前の看護だけではなく、先を見据えた実践ができているといえる。これらは、看護における課題の追求と専門的な知識と技術を発揮していると考えられる。

【傾聴と双方向性を意識したコミュニケーション】【思いを受け止め寄り添うことへの優れた力】【患者・同僚を尊重した丁寧なかかわり】の内容からは、スタッフとのアサーティブなコミュニケーションや患者の思いを傾聴する力など、双方向性を意識したコミュニケーションをとることができている。相手の気持ちや状況を受け止めつつ寄り添っており、援助的対人関係を形成し看護を実践する能力の発揮が伺えた。さらに、患者だけではなく同僚に対しても尊重した丁寧なかかわりができていることは、チームの一員として協働するための円滑な関係を構築できる力があるといえる。

【多職種連携、協働、リーダーシップも発揮できる応用力】は、双方向性を意識したコミュニケーションや同僚を尊重した関わりの結果発揮されていると考える。また、カンファレンスの実施や関係機関とのネットワークづくりなどは、保健医療福祉チームの一員として、自己の役割を認識できているといえる。

【自己研鑽の姿勢と周囲への影響】については、自身のスキルや能力を高めるための自己研鑽の姿勢が多く挙げられ、このことが様々な看護実践能力に繋がっていると考えられる。

また、自身だけではなく同僚への研鑽を勧め、後輩への指導に活かすという点では、チームで看護をすることの意識の表れであると推測する。「控えめではあるがコツコツと努力することができ、素直さ、一生懸命さがある先輩看護師からも可愛がられている」という内容から、周りから承認されることでさらに研鑽意欲が向上するのではないかと考える。

以上のことから、今回の看護管理者による本学の卒業生の看護実践能力の評価では、概ね学士にふさわしい能力を発揮できるよう成長していると評価できる。また、経験年数を重ねるにつれ、看護実践能力発揮の評価も上昇していた。しかし、この成長を促したのは、看護基礎教育だけではなく、入職後リーダー等を用いて段階的かつ継続的に教育支援が行われた結果である。今回の調査協力の同意は、147施設中112施設(76.2%)から得られ、自由記述が多く、熱心な回答が得られた。このことは、本学の卒業生が各地域に根付いたという意味があると考えられる。今後も本学と卒業生の就職先医療機関との繋がりを大切に、情報交換や教育の連携が、卒業生の成長を促す支援として有用であると考えられる。

2021(令和3)年度4月から新カリキュラムの運用が開始された。新しく7つのディプロマポリシーを掲げ、看護専門職としてのプロフェッショナルリズムの育成を主要な柱とした科目編成がなされている。今回得た示唆が反映された点の一つは、調査で評価が低かった国際的視野と地域特性と文化的多様性を理解し健康課題を捉える能力についてである。『国内外の地域特性と文化的多様性を理解し受け入れ貢献する態度を身に着けている』として新ディプロマポリシーに掲げられている。国内外の多文化と多様性、地域から学ぶ、援助的対人関係の形成という視点が織り込まれた。カリキュラムには、「信州・佐久学」や「佐久の医療とケアの歴史」などの新科目、実習では1年次と4年次に「地域生活者交流実習

I・II」が新たに配置された。自律的学修姿勢の育成については、プロフェッショナリズムの育成においても不可欠であり、引き続きディプロマポリシーに掲げられている。

今回まで本学は、卒業生の看護実践能力について看護管理者評価を実施してきた。他者評価も重要であるが、教育の評価をするためには卒業生自身の評価も今後は必要であると考える。

謝辞

COVID-19流行という未曾有の事態の中、アンケートにご協力をいただきました看護管理者および施設責任者の皆様に、深く感謝いたします。

本活動報告に関して、開示すべき利益相反

(COI)はない。

文献

青木雅子, 水野敏子, 中田晴美, 濱田由紀, 清水洋子(2017). 看護学部卒業生の卒後6ヵ月における看護専門職としての能力に関する到達状況. 東京女子医科大学看護学会誌, 12(1), 33-41.

濱耕子, 薬師寺裕子, 井上仁美, 形上五月, 陶山啓子, 中村慶子(2013). 看護系大学卒業生の看護実践能力に影響する要因の分析. 日本看護学教育学会誌, 23(1), 1-9.

佐々木晶子, 深田美香, 奥田玲子, 畑山久美子(2013). A県の臨床経験1年目から5年目の看護師の実践能力に関する自己評価. 米子医誌, 64, 154-162.